

アンナプルナ・ダウラギリ展望
ゴラパニ街道周遊
ヒマラヤトレッキング
(2003年3月16日～26日)

林 信子 (東京)

～ 大名旅行 ～

世界の屋根、標高八〇〇〇メートルのヒマラヤ山脈をかかえる国、ネパール王国は南をインドに、北側を中華人民共和国のチベット自治区にはさまれ、標高一四〇〇メートルの首都カトマンズは、人口一四〇万人の都市である。私がこのチベットに降り立ったのは三月中旬、朝夕の気温が十度前後、日中は二十五度をこえるという、一日の気温の差が激しい春先であった。乾季で国花の赤いラリーグラス（しゃくなげ）が咲く美しい季節ということで、かねてから、いつか機会があったら、トレッキングで訪ねようと思っていた。機会は案外早く訪れ、関西国際空港から直行便にロイヤルネパール航空に乗り、カトマンズに向かったのは三月十六日のことである。

翌日、カスマンズから国内線で四十分、トレッキングの入口ポカラに向かい、ポカラで一泊し、トレッキングを開始したのは山河地十八日であった。このツアーに参加した私たち（男性五人、女性七人）と、日本から添乗した奥田氏を含めた十三人に、サーダーのハスタ氏、ポーター長以下のポーター、コック長以下のキッチンボーイを含めた二十三人のネパール人たちが随行した。日本で、ネパールを訪れた人たちから聞いた「大名旅行」そのままの、ネパールトレッキングの内容だった。

朝はトレッキングに入る前に、洗面器いっぱいのお湯とともに、大きなカップに紅茶を入れ、各テントに運んでくれる。朝食の後は、シェルパのハスタ氏の先導案内で、トレッキングの開始、途中で通過する村のロッジやバッチェ（茶店）で、休憩をしながら歩く。昼食の場所に近づくころ、温かいジュースなどを持って、キッチンボーイが迎えてくれる。ジュースでひと息つき、歩いてきた足をいたわりながら昼食の場所に着くと、コック長以下が、昼食を作って待っている。楽しい昼食の後は再び歩き始め、次のテント宿泊地まで歩く。その後は自由時間であった。一日平均五、六時間の歩きだったろうか、宿泊地に着いたときにはテントもはってあり、自分たちのテントの中にはポーターが運んでくれた荷物があり、いたるつくせりのテント五泊六日のトレッキングだった。

～ ヒマラヤのフォークソングを聞きながら ～

「レッサンフィリリー、レッサンフィリリー、ウーレラジョンギ、ラーラマパンジャン、レッサンフィリリー、……」

私はときどきカトマンズで買ったCDで、ヒマラヤのフォークソングを聞く。CDを聞いていると、トレッキング中に見た真っ白なアンナプルナサウスやダウラギリ I 峰とともに、赤いラ

リーグラスが目の前に迫ってきて、懐かしさで胸がジーンとなってしまふ。

「THE HIMALAYAN LORES」という題のCDには、トレッキング中によく聞いた《Resham Firiri》という歌が入っていた。CDのラベルには「ネパールの有名なフォークソング」という副題がついている。英語で書かれている小さなジャケットによると、この歌はネパールの山の有名なフォークソングのひとつで、ロマンティックな感情を表現している歌、という説明があった。とても覚えやすい曲だが、この歌の題名を聞かなかったばかりに、カトマンドゥ市内観光のときに見学した、チベット仏教のボダナートをいやでも思い出す。

チベット仏教徒の巡礼地であるボダナートは、チベット文化の中心地であり、仏教のマンドラの構造をしているといわれる、大きなストゥーパ（仏塔）の周辺には、旅行者向けのおみやげ家や巡礼者向けの店が並んでいた。また近くに二十ほどのゴンパ（僧院）があり、多くの僧や尼僧の学問の修行地になっている。たくさん並ぶおみやげ屋の中に、レコード店を見つけた私は、大喜びで中に入った。対応に出た若い店員さんに

「レッスンフィリイリイ……」

と、うろ覚えの《Resham Firiri》を口ずさんで、CDをほしいというと、すぐに彼は出してくれた。四〇〇RS（七〇〇円ぐらい）だった。《Resham Firiri》は、私自身への大切なおみやげである。毎日のように聞いている。

Surisudnaという歌手が歌うCDを聞いていると、私の頭に、トレッキングしていたときが、すぐによみがえってくる。テントで同宿だったカメラ好きのSさんは、シャッターチャンスをおねらい、トレッキング中はいつも最後尾を歩くので、私も一緒によく後を歩いたが、写真もよく撮った。私たちの周囲にはいつも、サブガイドのアメリート・ライがいた。私たちが足をとめカメラを取り終わるまで、あるいはアメリートに記念写真を撮ってもらったりして、思う存分トレッキングを楽しむことができた。

「アメリート、スイングソング」

といって、彼にネパールの歌を何度も歌わせたが、彼の口からこのResham Fiririを何度も何度も聞いたものだった。

私たちがトレッキングをしている間、空は晴れて、いつも青く澄んでいた。時折ポーターの人とすれ違ったり、追い越したり、追い越されたりした。荷物を運び終えた帰りのロバ（荷役、農耕の家畜）の一行が、首に鈴をぶら下げ、花布の頭巾をかぶったロバを先頭に、ロバ追いに連れられて帰るのにも出会った。高い木に成長している国花のラリーグラス、赤いしゃくなげがあちこちのトレッキング街道で見られ、とりわけプーンヒル近くで見たラリーグラスと、ダウラギリI峰の雄々しい峰の対象が、いまでも鮮明に思い出されてくる。そしてどのようなときにも、サブガイドのアメリートやプライベートポーター、スリヤが歌う《Resham Firiri》が、いまでも私の胸をゆさぶり、思い出されてくるのだった。

スリヤ・プラサード・ダールは、大学生で二十一歳だという。ツアー同行の一番の年長者、T夫妻のプライベートポーターをして、写真を撮るTさんの前後を歩き、Tさんのリュックを背

負っていた。Sさんと私が写真などを撮っているときなど、スリヤと話したり、彼の歌をよく聞いたりした。スリヤはアメリート・ライよりも、高く響く声で歌った。

スリヤやアメリートの声にあわせ、私も鼻歌で歌うことによって、時には苦しく感じたトレッキングも、素晴らしいものになったのである。トレッキングが終わり、ふたりと別れる前日、お礼の意味を込めて、ボールペンとシャープペンシルをあげた。

～ プーンヒルよりヒマラヤの峰を見る ～

トレッキング最大のハイライトは、標高三一九八メートルのプーンヒルから見た、アンナプルナ山群とダウラギリの峰々が、その白い山肌を、朝日に光らせた景色だった。七〇〇〇メートルから八〇〇〇メートル級の山々が、見事に目の前に展開していた。私はこれらの山々を前に、神の存在を疑わないわけにはいかなかった。神が創造されたこの素晴らしい光景は、見えるものをはるかに超え、鋭く厳しいものに違いない。それでも人々は、自分の力、それを与えてくれた神の加護を信じて、神への挑戦を重ねてきているのだ。

西側の中央にたつダウラギリ I 峰は標高八一六七メートル、その右には六九二〇メートルのトゥクチェ・ピーク、ダウラギリ I 峰の左には、ダウラギリ II 峰（七七五メートル）、IV 峰（七六六メートル）と続く。東側のアンナプルナ山群では、右からポカラからも見えた魚の尾のような、標高六九九三メートルマチャブチャレ、次に六四四四メートルのヒウンチュリ、突き出ているのは七二一九メートルのアンナプルナサウス、次にバラハシカール（七六四七メートル）、アンナプルナ I 峰（八〇九メートル）と続いている。このトレッキングコースのハイライトである。

大勢の人がきていたが、世界の屋根の数々を目の前に、私は記念写真を撮ってもらったり、デジカメで山群の姿をとにえたりした。外人の若いカップルから

「私たちはイギリスからきた。韓国人か？日本人か？」

と聞かれた。私が

「日本人です」

と答えると、カメラのシャッターを押して欲しいという。カメラを返すとき、私たちはご自然に、満面の笑顔で握手していた。

プーンヒルには一時間以上もいた。気がつくと、一人減り 2 人へって、最後は私と S さんとサブガイドのアメリート・ライの、三人だけになっていた。

ゴラパニ上村のテントに帰ってからは、一日中自由行動だった。たっぷりと休憩時間はある。今朝は、まだ夜明け前の四時三十分にお茶を飲み、四時四十五分にテントを出発した。六時過ぎにプーンヒルに着き、ご来光を拝み、それからカメラのシャッターを押し続けてきた。前日の夕方、突然あられもよの雪が降り寒くなった。ゴラパニ上村（標高二八七八メートル）の朝は、多分氷点下になったことだろう。今朝は暗い中ヘッドランプを頼りに、雪道を登ったのだった。プーンヒルにも一面に雪が残っていた。それだけに思い出深い、ヒマラヤトレッキン

グとなった。帰りの道で、赤いラリーグラスとダウラギリ I 峰や、アンナプルナサウスを一緒に画面におさめることができ、最高のカメラタイを持つことができた。八時半にテント村にいた。そのからが朝食だった。

～ 露天の買物 ～

「お店がでているわよ、いってこない？」

東京から参加していたHさんが呼びにきた。標高三一九八メートルのプーンヒルで、アンナプルナ、ダウラギリの山々を見た後の、最高の気分のおかげだった。ゴラパニのキャンプ場の近く、ロッジや店の並ぶメインストリートに、四つ五つの露天が出ていた。ほとんどチベットからきている人たちの店で、それらの店で、そのあげくの買い物が、いつも私たちに幸せな気分にした。

「ハウ・マッチ」

宝石のようないろいろな石で作った、きれいなかわいい小物入れ、手に取って見ているだけで楽しい。

「四〇〇ルピーだよ」

と最初にいっていた店のおじさんに

「三〇〇ルピーにして」

「いや、三五〇ルピーならいいよ」

「三〇〇ルピーだったら、買うわ」

といった調子で、自分の希望の三〇〇ルピーで買えれば、そりは楽しい楽しい買物をしたことになるのだ。会話の言葉なんて何とかなるもの、多少の英語の単語さえ忘れていなければ・・・こんなこともあった。

「三〇〇ルピーなら、買わないわ」

と私がいえば

「じゃ、いくらだったら買うの？」

と、店のおじさんがいう。

「二〇〇ルピーだったら、買うわ」

と、自分で値段を決める私に、

「じゃ、いいよ。二〇〇ルピーで」

おじさんはまけてくれた。そのとき買ったネックレスは、何度も私の首元を飾った。

日本の生活からすれば、驚くほど物価は安い。この値段、金額で、この品物をといることを、何度も味わい経験した。こんなに安くて、本当にもうけがあるのだろうか、疑うほどだった。そして物の値段と同じく、もうけも打算もなく感じられたのが、親切で温かいネパールの人々の心、ふるまいだった。彼らの行動は、昔、私たち日本人が持っていたものに近いものを、いままも持って生きていて人間の、ありのままの姿だった。

～ 女性ポーターとのふれあい ～

私たちのポーターの中に、女性が三人いた。そのうちの二人はとりわけ若く、トレッキングの

最初から最後まで一緒だった。名前と年齢を知りたいと思ったが、言葉がしゃべれないので、大学生のスリヤに聞いてもらった。一人はクマリ・グルンという名で、二十五歳、もう一人はソル・ミラといい、まだ二十歳でほおが赤く、子供のような顔立ちをしていて、驚いたことには、ふたりはいつでもロングスカートだった。はきものはゴムゾウリで、ソル・ミラなど、寒いとき意外は素足だった。

彼女たちは私たちを見ると、いつも笑顔を見せてくれた。トレッキング四日目、標高二七二一メートルのタダパニ村の露店で、ショールの買物をしたがクマリ・グルンがつきそってくれた。一枚二〇〇ルピーのチベットライム（チベットの小動物）のショールを、三枚買うので五〇〇ルピーにしてほしいとあったが、店主はなかなか譲ってくれなかった。そのクマリ・グルンがきたので、彼女の笑顔に賛同を求め、店主に五〇〇ルピーにしてくれれば買うからと、再度話すとOKの返事が出た。店のおじさんは、クマリ・グルンと顔なじみだったらしい。私は、クマリ・グルンのショールに頬を寄せて

「サンキュー」

と、お礼をいった。彼女がいつも離さないグリーンのかな大きなショールだ。

夜、食事テントの前で、ネパールの人たちが歌って踊ってくれた。ガイドのアメリート・ライが私の手を引っぱるので、少し照れくさかったが、私も彼らと一緒に、歌に合わせて手や足をふって踊った。いいかげんな踊りだったが、彼らと踊る楽しさを味わった。ネパールの男性たちの間から、ソル・ミラに踊りのさそいがかかった。最初しりごみをしていた彼女も、決心して踊りだした。そして続いてクマリ・グルンも、肩にかけていたショールを頭にかぶって踊りだした。彼女たちの姿を追って、さかんに私はカメラのシャッターを切った。

トレッキングの五日目、明日は別れるという前日、私はソル・ミラに日本から持ってきたハンドタオルを、クマリ・グルンには、以前に中国旅行で買ってきた、スカーフを餞別にした。

～ 日本人に合った食事 ～

コックのパダム・ライ氏は三十代後半ぐらいだろうか。毎食、日本人の私たちに合った食事を作ってくれた。朝は、五班パンケーキに玉子焼き、煮物、わかめに野菜の入ったみそ汁、スープなどが出た。おかゆが出た朝もあった。紅茶、コーヒーは、食後いつでも飲み放題である。

昼食は変化に富んでいた。サンドイッチ、焼きそば、日本そば、おすし、スパゲティ、ひやむぎ、おにぎりなどが出て、同じものを食べた日はなかった。必ずスープや野菜サラダがつき、ときにはハムや果物がついた。最後の日の昼食は、玉子丼だった。ハムのソテーに野菜サラダ、コーンとトマト、ソーセージのいためもの、桃缶のデザートがついた。

夕食はもっと手がこんでいた。最初の夜は、チキンカツだった。生野菜のキャベツがつき、ほかにナスやオクラ、菜っ葉のゆでたもの、みそ汁のりやご飯もあった。ご飯は日本と違って、

細長いお米である。少しパラパラしているが、トレッキングした体にはおいしい。大根のサラダやじゃがいも、にんじんのスープ、天ぷらが出たときにはとても驚いた。ナス、にんじん、じゃがいも、さつまいも、ネギなどの揚げ物である。すきやきもおいしかった。肉のほかに春雨やピーマン、菜っ葉、トマトなども入っていた。チベット風ギョーザ、モモが出た夕食もあった。チャーハンやピザ、パパールという薄いせんべいを、ミルクスープと一緒に食べた夜もあった。

「今夜はとりを五羽、しめたですよ」

最後の夕食のとき、添乗員の奥田さんがいった。とたんに私は、トレッキング中に見た、人家の家に平気で出入りしていた、鶏の姿を思い出した。ネパールでは家畜も、人と同じ動作をしているのだ。日本のように、人口飼料を食べさせられず、家のまわりの草を食べている、貴重な天然の鶏なのである。案の定、鶏のフライが出た。上にのりがたっぷりかけてあった。トマト、キャベツがついている。揚げたポテト、ゆでたナス、ニガウリの煮物、スープが出た。最後にナッツの入った手製のケーキが出たので、全員が子どもにかえって、キャーキャーと喜んだ。

思い出しても、食事作りは大変だったことと思う。なべ、かま、やかん、調味料などの台所用品、食器、スプーン、フォーク、おはしなどの食事用品、テーブルやテーブルセンター、イスにいたるまで、ポーターたちが背負って、次のテント村まで運ぶのである。彼らによって、食事やお茶の心配もいらず、私たちは、快適なトレッキングができるのである。

～ サーダーと添乗員 ～

私たちについてくれた、二十三人のネパール人の長は、サーダーのハスタ氏であった。独身で二十八歳、小柄だがやさしくて、静かな印象の人であった。ハスタ氏は、私たちトレッカーの先頭に立ち、五泊六日のトレッキングを、成功させてくれた人でもある。彼は勉強家で、トレッキングの後ポカラで、日本語の教師を二週間やる予定のために、ネパールにきたというI氏に、毎日、日本語を教えてもらっていた。日本語も上手で、話しかけると笑顔で答えてくれた。彼の「ビスターリ（ゆっくり）」、「ビスターリ」といって歩くスタイルには、実に好感が持たれた。

日本から私たちの添乗員になってくれている奥田氏は、関西大学OBの登山家で、母校のヘッドコーチもしており、一九九八年には、標高八五八六mのカンチェンジュンガ北壁を登頂した。そのとき酸素不足で、一時目が見えなくなったが、仲間に助けられて下山したという。そのとき一緒に登った仲間で、山の土になった人もいと聞いた。二〇〇〇年には、南米アルゼンチンのアコンカグア（標高六九六〇メートル）に、俳優の西田敏行氏と六七〇〇メートルの地点まで登っている。二〇〇二年には標高八八四八メートルのエベレストに、片山右京隊のサポーターとして参加した人でもある。また、同じ二〇〇二年に、標高六一六〇メートルのアイランド・ピーク（ネパール）に、全盲の弁護士をガイドして登頂を成功させている。三〇代後半に入ったばかりの奥田氏の、登山暦は実に素晴らしい。

私たちが、トレッキングの最終日である3月二三日、シャウリバザールに着くと、明治大学の遠征隊一行に会った。奥田氏と知り合いの明治大学OBの人は若い学生たちを連れていたが、ポーターの背負う荷物も、なんと一八〇個もあるということだった。大きな荷物を背に、次々と登ってゆくポーターの姿を見送りながら、私は五日前の最初の登りを思い出していた。シャウリバザールで最後の昼食の後には、小雨が降ったりやんだりしたので、傘をさして下山した。

出発地点のナヤプルに着いたのは、一四時四十五分だった。とたんに下界に下りた気がした。車の列、人の群れ、山の清々しい空気は、もうそこにはなかった。ナヤプルでハスタ氏を除くスタッフの人すべてと別れた。ポカラのホテル・トゥルシに着いたのは十六時四十五分だった。五泊六日のトレッキングは、それぞれが元気で、無事に終わった。

～ 山岳民族の子どもたち ～

トレッキング中、村に入るたびに、子どもたちにもよく出会った。標高の高いところでは、はなをたらした裸足の子が、まだまだ多い。学校にいくような年齢と思われる子が、小さい子と遊んでいる。昔、日本で見た光景と同じである。標高が下がるにつれて、生徒たちはかわいい制服を着ていたりする。子どもたちの教育は、満四歳以上から入学でき、四歳の一年生もいるという。一年生から五年生までが小学校、六、七年生が中学校、八年生から十年生までが、高等学校になっているが、実際には中途退学する子が多いという。五年制の小学校でも、実際に卒業するのは三分の一ぐらいで、女性とは入学率も卒業率も低く、ネパールでは、子どもは労働力として貴重な存在になっているのだという。(ダイヤモンド社、地球の歩き方による)

トレッキング中、人に出会うと必ず、両手を合わせて「ナマステ」と挨拶した。「ナマステ」とは、こんにちは、おはよう、さようならなどにも使える、挨拶の言葉である。本来はヒンドゥ教のシヴァ神にささげる、真言からきているという。村で出会った小さな子どもたちと「ナクマステ」の挨拶をするとき、私は、なんとも楽しく気持ちのいい基部になったものである。

トレッキングの最後に泊まった町ガンドルンでは、町歩きの際、小学校の行校庭で一人の老人に出会った。その老人は、日本人が作った学校まで案内してくれた。トレッキングの後ポカラで日本語の先生をするというI氏を通訳に、私たちはそのハイスクールにいった。おりよく男性の先生がいて、教員室に案内してくれ、学校の由来を説明してくれた。いまから五十三年前に、日本人の玉川大学の小沢さんという人が、建ててくれたということだった。この小沢さんの姿を、教員室の古い写真で見ることができた。現在では、日本政府からの援助もないという。過去に立派な日本人がいたことに、みな感銘を覚えていた。

～ トレッキング中のトイレ事情 ～

私から、ネパールのヒマラヤトレッキングにいったことを聞いたある友人が「私は、そんなところにはいけないわ」といった。そんなところとは、トイレ事情のことである。

五泊六日のトレッキング中、夜はテントのそばの、ロッジの水洗トイレを借りたのが三日間、男女別のトイレテントを立て、中に穴を掘っただけのトイレを作って、そこに用をたしたのが三日間だった。トレッキングをしている昼間は、すべてロッジやバッティ（食堂を兼ねた簡素な宿）の水洗トイレを借りた。ネパールの山岳地帯では当たり前の穴掘りトイレは、私の小さいころの日本のトイレと、余り変わらない。日本も最近ほとんど水洗になったが、二十年前ごろまでは、まだまだネパールの現状に似たトイレが多かった。ネパールのトイレを、私は堂々と使うことができた。

～ ネパールの棚田 ～

ネパールの山岳地帯に住む人々は、山の上の上まで、棚田を作っている。標高が高いと、作物を作るにあたっての気候もよくない。やせた土地で取れる作物も、それなりの物だ。だが、人々はたくましい。先祖代々の棚田を、きれいな形で守っている。棚田の向こうに、真っ白いヒマラヤの高い峰々を望む風景は、何度見ても飽きることがない。ネパールならではの、自然の風物詩、心から感嘆したものである。

～ カトマンズの街で ～

カトマンズ市内に入った三月十七日朝、ホテルの周囲を散歩したとき、牛が三匹、前をのっそりと歩いているのに出会い、びっくりした。首のしるしやひももつけず、三匹は道の真ん中をのしのと歩いていた。後ろからきた車や自転車、バイクなどは、牛にぶつからないように運転していく。牛は神聖な動物だという。ヒンドゥ教徒の多いカトマンズの街のこと、道でも牛は堂々と大様なのである。

三月二十四日カトマンズ市内に戻り、久しぶりに日本料理店「華」で、日本食を食べた。その後、併設されている戸外の温泉で入浴、二階のマッサージ店で、マッサージをしてもらった。このマッサージ店は、日本地の女性の経営で現地人のマッサージ師はみな、日本人向けのマッサージを勉強したという。社長は十六年ほど前、トレッキング中に病気になり、そのとき体に合ったマッサージを受けることができず、その痛手から日本に帰ってから、マッサージ師の資格を取り、日本式マッサージの学校を作り、この地に開業した。マッサージをしてもらった後、大粒のスコールがやってきた。予定した買物をやめ、ホテルまで女性社長に送ってもらった。温泉に入ったせいだろうか、体が軽くなったような気がした。あめのおかげで、その日はゆっくりと休んだ。

ネパールの首都カトマンズは、乾燥していてほこりっぽいので、旅行社からもらった持物の注意書きの中に、かぜ薬りのや胃腸薬、解熱剤など、通常の薬のほか、のどに関するものだけでも、うがい薬、せき止め、リップクリーム、のどあめ、トローチなどが列記してあった。私は、それらをすべて用意していったのだから、実際にはほとんど薬は使わなかった。トレッキングが終わり、カトマンズ市内の観光に入るころから、だんだんのどがガサガサして気になり始めていた。

タメル地区の人ごみがすごかった。小さな細い道の両側に、びっしりとみやげ店が並んでいる。旧王宮やクマリの館前など、観光客がいっぱいだった。人、車、バイク、自転車が入り乱れて走る。信号のないカトマンズの道路は、少しも気が許せなかった。タメル地区のような細い道路でさえ、バイクや自転車までが入ってくる。音がするたびによけなければならないので、私はふと車やバイクをよけさせて、堂々とホテル前を歩いていた、牛たちのことを思い出した。そして私たち観光客は、牛よりも低い地位なのかと・・・冗談に思ったことだった。

TさんとSさんとの自由行動のときに、タメル地区からの帰り、ホテルに急いだばかりに、王宮専用の道路を知らずに歩いていて、王宮の警護官に注意された。言葉がわからないので注意もわからず

「私たちは、ホテルに帰るところだ」

とばかりいっていたが、朝、添乗員の奥田氏からいわれたことを思い出し、気がついたのは少し時間がたってからだった。落ち着いてみると私たちの前後には、誰も歩いていないのである。歩いてはいけない道路だったのである。

「ソーリー、ソーリー」

といって、向かい側に渡った。

「とんでもない日本人」

と、警護官たちは思ったことだろう。後に三人で、自分たちの非を大いに笑ったのであったが・・・。

～ パシュパティナート ～

現地案内人K氏によるカトマンズ市内観光は、最初がパシュパティナートだった。ガンジス川の支流パグマティ川の川岸にある、ネパール最大のヒンドゥ教寺院である。ヒンドゥ三大神のひとり、シヴァ神を祭り、現王朝も守護神としている。

K氏の案内で入場料七十五Rsを支払い、寺院の領域に入った。にごった土色のパグマティ川に沿って歩き出すと、左手の対岸に、火葬台のアルエガートが数台目に入った。一台の火葬台から金色の炎が、いま盛んに燃え盛っていた。アルエガートのことは、ネパールにくる前に誰彼から話しを聞いていたし、観光案内書にも載っていた。有名なヒンドゥ教信者の最後の光景を、いま目の前にして、私は厳かというより、むしろ自然で当たり前の光景として、素直に受け入れている自分を感じていた。と同時に自分が、この場所でのこの光景を、自然なこととして受け入れていることの、不思議さを感じずにはいられなかった。隣の火葬台では、大きい木を何層にも組んで、次のヒンドゥ教との死者を待受けている。

私たち旅行者やヒンドゥ教徒ではない者は、パシュパティナート寺院に入ることはできない。川の対岸で、火葬を見守るばかりであった。

「橋の上流は、王族の火葬台です」

K氏がいう。橋をはさんで上の二台が王族の火葬台、下流は庶民の火葬台だという。墓を作らず、輪廻転生を信ずる、ヒンドゥ教の生死感に出会いながら、私はひとりの旅行者として、観光地のひとつであるパシュパティナートに臨んでいる、異邦人の異教徒にすぎなかった。

パシュパティナート寺院の周辺には、たくさんのヒンドゥ教寺院があった。火葬ガートの対岸に位置するそれらの寺院をK氏の案内で回った後、再びパグマティ川の火葬台の見える場所に来た。先ほど金色の炎に包まれていた火葬台から、遺灰のすべてを、係員がパグマティ川に流そうとするところだった。大きな刷毛のようなもので、一気にすべてを流した。後の台を静かに丁寧に掃き清めている。そのすぐ後だった。到着したばかりと思われる白い遺体の包みが運ばれ、家族の人たちが数人、そのそばに付き添っている。中年の婦人がその白い遺体のそばで、なき悲しんでいた。その声が川の対岸の壁や寺院の壁にぶつかり、上から見下ろしている私たちの耳に、異常なほど大きく聞こえた。奇妙なことに、それらの光景を見下ろしている私は、まるで映画やテレビでも見ているような気分で、傍観していた。

おそらく旅行者としてこの場に臨んだ者のほとんどが、私と同じ心だったのではないか・・・？ 生も死も自然に受け入れられているヒンドゥ教徒たちの最後の別れの姿ではなかったか。人は生れてくるとき、一人の個として生れてくる。幾星霜の生かされた生活や人生をすごして、最後にたどり着くときも、やはりひとりの個としてである。

ヒンドゥ教信者としてそれは変わらず、むしろどの宗教よりも自然にかなっているように私は思う。肉体を離れた魂は、おそらく個人の信ずる神のもとに帰ったことだろう。先ほど燃えつきて、パグマティ川に流された遺体も、いま目の前に横たわっている白い遺体も、すでに魂は、彼らの神の手中にあるのだ。

私はトレッキングの最中に見た、山での鳥葬の場面を思い出した。あれも自然の理にかなって、魂を離れた肉体は、もはやすでに単なる物体にすぎない。その物体を自然に生きる鳥にささげる風習は、異教徒であるトレッカーの私たちから見れば、死後にそのような目に合わせる事など、とても残酷で恐ろしく、考えられないことである。だが、チベット仏教やヒンドゥ教の教えを信じ、輪廻転生を信ずる墓を持たない教徒にとっては、ごく自然に受け入れてきた、先祖伝来の業であるに違いない。

出口に向かっていると、旅行者の周りをひっきりなしに、子どもや大人の物売りが取り巻いてくる。その人たちをよけながら、パシュパティナートを後にした。火葬台から燃え盛る炎、遺灰をすべて聖なる川パグマティ川に流す光景、次を待つコンクリートの火葬台、火葬台から漂ってくる異臭、私は目をとじ、それらをしっかりと目の内側にしまいこんだ。それから心の中で、ひそかに両手を合わせていた。

二〇〇三年八月十二日